漢籍訓点資料に於ける文末表現について

――醍醐寺本遊仙窟を中心に――

本 光 隆

松

目

はじめに

、漢籍訓点資料に於ける和文語の出現

三、漢籍訓点資料に於ける文末表現二、醍醐寺本遊仙窟に於ける文末表現

おわりに

はじめに

的な異同のあることが論じられている。 間の訓読法の特徴的異同や、博士家間の異同などが解明され、特に、漢籍の訓読に於ける訓読法の異同は、かなり詳細 な部分まで解明されている。漢字音の面からは、漢籍の資料の中に、紀伝道関係の資料と明経道関係の資料との間で質 平安・鎌倉時代の訓点資料に於ける訓読法の異同は、先学の御研究によりかなりの部分が明らかにされている。宗派(1)

紀伝道関係資料と明経道関係資料との間に、訓読語の上に差違があったものであることを述べようとするものである。 本稿は、こうした先学の御高論に導かれて、醍醐寺本遊仙窟を中心に、漢籍訓点資料に於ける文末表現を取り上げて、

漢籍訓点資料に於ける和文語の出現

の伝来は、 遊仙窟は、 奈良時代であると言われ、万葉集等への影響が指摘され、以来、日本文学への影響、少なかざるものがある 唐代の小説で、 本文は四六文を用い、韻散文を交えて、 唐代の俗語も多いといわれるものである。本邦へ

の真福寺蔵本、醍醐寺蔵本が知られている。院政期以前の資料は加点本、無点本を問わず知られてはいないようである。 鎌倉時代の訓点資料としては、近年、山崎誠氏により、鎌倉時代語研究第八輯に紹介された零巻が古く、 南北朝時代

と言われる。

本稿に取り上げる醍醐寺本遊仙窟には、次の如き奥書が存する。

如此仍被受早其後/所召御侍讀也 所傳也/仍維時卿乘毛車罷之處彼神主着布衣目/文車虫飡書取出之云(君者文王之大祖/我朝之文士也然而所存 右此書者江中納言維時卿康和 聖主爲/學士之際再三蒙 宣旨之處未聞今見之/剩仰天之境節惑仁云木古嶋神主

***云正安二年二月十一日書寫之早**

同廿八日交点了

(以上本奥書)

康永三年十月十六日模之訖/ 法印權大僧都宗算 (花押)

には、否定的な研究も存する。 知られる訓点資料である。本奥書には、 醍醐寺本遊仙窟は、南北朝時代康永三年の書寫であるが、その親本は、正安二年に書寫・加点されたものであることが 大江維時の名が見えるものであるが、大江家の訓説を伝えたものであるとする

特殊な訓読をされたものとして位置付けられているものであるが、その特殊性の一として、和文的訓読語が指摘されて 醍醐寺本遊仙窟の訓読は、日本書紀の訓読や石山寺蔵大唐西域記長寛点の訓読とともに、 一般の訓点資料とは異なる

いる。醍醐寺本遊仙窟に認められ和文語は、以下の如きものが存する。(4)

1、[シテ]

○深谷帶 地 鑿; 穿 涯(平濁)-岸 〔之〕形; (7・地)

2、[……ナタ]

○蠟燭(訓)兩邊、明。(短•地)

○薫(平)香(平)四_面合(訓)先-色兩_邊 被(訓)(9・韻)

4、[ケリ] ○三日 繞 梁 韓(平)-娥(平濁) 餘-音 是 實(訓) (弱・地)

○高 不 通,五-嫂。(!ゆ・会) ○覺 後忽 非 貞 (90・韻)

出現が認められる。以下の和文系の語は、いずれも会話部分、又は韻文部分に出現するものである。 「ケリ」は、平安後半期の訓点資料にはあまり出現しない語であると言われるものであるが、地の文、韻文、会話文に

○人跡罕 及 鳥洛 纔通 (14·会)

5、 [2]

6、[オハス]

7、[イト]

○少府時、亦應, 太 飢, (窓・会) ○張-郎心 專 賦 詩 太、有 道-理。(24・会)

○五嫂、太、能〈順〉、作舞、(33·会) ○張郎、亦 _ 復、太 能 (33·会)

8、[イトド]

○向-來、太-ᆢ不 遜」(33・会)

右の7・8の「太」字は、地の文では「ハナハダ」と訓ぜられているものである。 ○無事 風一 聲 徹: 他耳:(24・韻) 9、[ラム]

強 激 (訓) 人 (招・韻)

○從何_處,來 (216・韻) ○定知、心肯 在 方-便

10、「メリ」 〇鳥 洛 纔 通 (14・会) ○方-便 待! 渠 招 (似・ッキ(く)ウシテ管マッラム キ!!カ マネカムことを ッキ (く)ウシテ管マッラム キ!!カ マネカムことを かんアンム す!!カ マネカムこんを かんアンム しんアンム イト ッカハム (464 • 会)

9の「ラム」、10の「メリ」は、訓点資料中その使用が稀なものであると言われるものである。 ○既有好意(訓) |何カ _ 須却_入| (汕・会) に アメ、タッ ルキ イタハニルタテカ クカイリ ル

11、[コソ……己然形]

12、[連体形終止]

○如_何、意 (訓)不同 應 來: 主 手 裏;、翻 入:客 懷 中;、(绍・韻)の可惜、尖 頭 物 (訓) 終_日 在: 皮 中 : (33・韻)いき、 五嫂、爲 作: 酒章。(23・会)

13、[已然形終止]

 \equiv

○向-來、太-^ 不遜 漸-^ 深 _ 入[也]。(39・会 存疑)

右の已然形終止の例は、右傍仮名「ヨフケヌレ」の下に「ハ」の擦消のあるもので、已然形終止の例として疑いの残る

14、 [エ・・・・ジ]

○畫 (去漂). -匠 (去) 迎_生 模 (訓)不成 (120・韻)

○報』 余 詩:曰、「(韻文)」(41) ○僕、因 詠 曰、「(韻文)」(37) 分に多く認められる傾向がある。醍醐寺本遊仙窟の韻文部分は、張文成と五嫂・十娘などとのやり取りの部分に、分に多く認められる傾向がある。醍醐寺本遊仙窟の韻文部分は、張文成と五嫂・十娘などとのやり取りの部分に、 以上の如きものが醍醐寺本遊仙窟に認められる和文系語の出現の実態であるが、その出現は、比較的会話部分や韻文部は、

のと判断される。即ち、醍醐寺本遊仙窟の訓読に出現する和文系の語は、会話又はそれに准ずる部分に使用例が多いと の如く、会話に准ずる形で出現するのであり、会話部分と韻文部分とは地の文に対して一括して取扱うことができるも

言うことができるものである。

年点に認められる。神田本白氏文集は、現存巻第三・四であり、新楽府の部分である。 醍醐寺本遊仙窟以外に、漢籍の訓点資料中に用いられた和文系語は、管見の及んだ限りでは、神田本白氏文集天永四

高山寺本荘子鎌倉初期点では、以下の如くである。

2

いづ

倉 時 代 語 研 空

〇子-路、旁 (去) 車 而間、曰「(中略) 得 無 太甚 乎。(以下略)」(三十一郎)

○客 曰、「(中略) 不亦泰 (去)、多-事 乎 (以下略)」(三十一47)

高山寺本荘子鎌倉初期点では、巻第三十三に「太」字の付訓確例が三例みとめられ「ハナハダ」の付訓があるが、 れも地の文での使用例である。

[ラム]

〇曰、「(中略) 臣 (音) 竊、爲 (去) 大-王、 薄 〔之〕。」(三十一62)

以上は、いづれも会話文中の使用例である。

が、それも 史記孝文本紀延久五年点にも、平安後半期の訓点資料には稀にしか見出されないと言われる「ケリ」の用例が存する

○薄昭還 報 曰、「信 〔矣〕。(以下略)」(28)

の如く会話文中の使用例であって、醍醐寺本遊仙窟に於ける和文系語の出現傾向を裏付けるものと思われる。

の出現も会話部分に片寄ることが指摘されている。即ち、訓点資料に於ける所謂地の文と、会話文、又はそれに准ずる(5) ものとして位置付けられる韻文との訓読に於いては、用語差が存したことが考えられるものである。 漢籍訓点資料の例ではないが、平安中期の佛書の説話の訓点資料である石山寺本仏説太子須陀拏経に於ける和文系語

二、醍醐寺本遊仙窟に於ける文末表現

末を整理し、地の文と会話文との言語差の問題を検討してみることとする。 前節に於いて、地の文と会話文とでは訓読用語に差のあることを推定したが、醍醐寺本遊仙窟を資料として、その文

訓点資料は、一般に、言語資料として比較的良質のものには、仮名や句切点、又は仮名とヲコト点との加点が存する

部分が存する。 部分の認定には整わない面が多い。次節に検討を加えた資料についても、特に、会話部分の認定については、整わない 前半期の資料を中心に、「イハク……ト」「イハク……トイフ」などの呼応が比較的整然と行われる資料が存し、 も同様であるが、各資料の右傍訓、 表記とク語法による定形が存して、これに頼っての認定が可能であり、私に、認定を行ったものである。又、 に於いて、恣意の介在する余地を認めざるを得ない。しかし、少なくとも、会話文の最初の部分については、 れる箇所に、必ずしも句点が打たれている訳ではなく、又、会話部分も「イハク」の呼応語を欠いており、文末・会話 定も容易であることが多い。ここに取り上げる醍醐寺本遊仙窟は、仮名・ヲコト点の加点資料であるが、文末と考えら のであり、その訓点資料に於いては、句切点により文末の認定が比較的容易なものが多い。会話部分に関しても、 即ち、文末・会話部分の認定に於いては、それぞれの訳注などを参照したが、当時の訓読を再現する上 即ち、各資料の基底訓を中心に一通りの訓読による集計を試みたもので、 左傍等に 次節以降 原漢文の その認

の部分に区別して、その文末を整理したものが表一である。又、この表一を基にまとめ直したものが表二である。 醍醐寺本遊仙窟と、加えて真福寺本遊仙窟文和二年点を取り上げ、地の文・会話文・韻文と資料中に一通存する書簡

併記された異訓が存する場合は採らないこととする。

△表1∨

△副詞〉				〈体言〉	
	マナ…コト	コト	コト (倒置)		
1		1	2	2	醍地
		 	2	5	醍会話
			2	3	麗韻文
		! ! ! !	! ! !		醍書
					真地
1	1	1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		眞会話
1		1		1	眞韻文
			1		眞書

△助動詞>	命令形		連体形	<形容詞>終止形	命令形								連体形			<動詞> 終止形	△感動詞>
	ナカレ	□…連体形	ゾ…連体形			終止法	□…連体形	ゾ…連体形	イカガセムトスル	ヲカ…連体形	ニカ…連体形	テカ…連体形	カ…連体形	ガヘンズ	ムトス		
	Light of the state		1	12									1 1 1 1 1 1 1 1		3	141	
	6		 	22	9		1	1	1	1	1	1	7		1	63	2
	4	ALCOHOL:	1 1 1 1 1 1 1 1	22	7			1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		1 1 1 1 1 1 1 1 1	3		3	99	
			:	2				1		 	 	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1		1	9	
		1	1	11			1	: : : : :				 	1	2	4	107	
	7	-	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	21	12		1	2	1	1	1	F F E E I I I	2		1	72	2
	4		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	22	7	1	t t t t t t	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	 		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1		1	98	
			1 1 1 5 6 6 7 1	2	1		 	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	 	 		: : : : : : :	8	

三六

鎌倉時代語研究

			IJ		1		タリ				ヌ			ツ			シム	ラル
		連体形	終止形	連体形			終止形	已然形	連体形		終止形		連体形	終止形	命令形	連体形	終止形	終止形
カ・・・ル	ゾ…ル	終止法		ニカ…タル	ラレ+タリ	ニ+タリ	111111111111111111111111111111111111111	終止法	カ…ヌ	レーヌ		カ…ツル	ニカ…マシツル			終止法		
			26			1	6				7			2			7	
		1	23		1		6	1	1		1		1		1		4	
	1	1	25				10			4	4			1	3	1	6	1
	1		4				1			:	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1						1	
	1		20				12				8			3			5	
1	1		18	1	1		13				4	2		1	1		2	
	1	1	13				13			4	5				1	1	5	
	1		3				2				1							

メリ					ベシ	ゴトシ	タリ					ナリ		ケリ			-	キ
連体形		3 3 3 3 3 3 3 1 5 7 7	連体形		終止形	終止形	終止形	連体形				終止形		終止形		 		終止形
ゾ…メル	カ…ベキ	□…ベキ	ゾ…ベキ	ヌ+ベシ				カ…ナル	ズ+ナリ	ル+ナリ	タル+ナリ		ザリーケリ	ナリ+ケリ	マシ+キ	レ+ザリ+キ	リナキ	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
			1		; ; ; ;	3	2			1 1 1 1 1 1	1	10		1		; ; ; ; ;	1	1
1		1	1		3	2				1		18	1	t t t t t		1 1 1 1 1 1 1 1	2	4
	2			2	10	2	1		1			11	1	t t t t t		1	t t t t t	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
							1					1				 		4
	-		1			4						24						t t t t t
			1		3					1		28	1		1	1		11
					15	2	1	1				15	1			1	1	1
-						1										1		5

																	ム		ラム
漢籍訓点资										連体形							終止形	已然形	終止形
漢籍訓点資料における文末表現について	ノ…ム	ノ…タラ+ム	□ ::∠	ヤ…ム	トカ…ム	テカ…ム	ニカ…ム	カ…ム	ゾ…ム	ゾ…ザラム	ガヘンゼム	ナラ+ム	ナーム	テ+ム	ザラ+ム	シメーム		コソ…ラメ	
について			1					1	t ; ; ; ; ; ; ;	1				1		1	2		
		1	1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1	1	1	1		 	1	1	1	1	24		2
	1		1	I	1 t t t 1 1 1		2	10	2			1	3	4	1 1 1 1 1 1 1	4	14	2	1
		1			1		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1	1	# # # 1 1 1 1 1 1		t 1 1 1 1 1 1 1 1	 	1	 	r ; ; ; ; ; ;	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		
) 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	! ! ! !	1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1			† † † † † † †	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1			
		t t t 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		1	1	1	5	1	1	1		 	1	[1	21		1
11		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		1	 	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	7	2	 		1	1	1	 	1	24	2	
三九			1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	! ! !	\$ 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	 	1			1 1 1 1 1 1	; ; ; ;	1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		1		

鎌
倉
時
代
語
研
究

			ヲ	<助詞>									ズ	ジ	ラシ			マシ
			; ; ; ; ; ; ; ; ; ;	\ 	命令形				連体形				終止形	終止形	終止形	連体形		終止形
倒置		コトヲ	コトヲ(倒置)	America de la companya de la company		ヌ(終止)	カ…ザル	ロ…ザル	ゾ…ザル	ベカラ+ズ	アラズ	ガヘンゼズ				カ…マシ	シメーマシ	
			1							2	; ; ; ; ;	3	16					
	1	1	10		2			1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1	1	5		19	13				2
		2	13					1		2	6		21	3		1		
								: : : : : : : : : : : : : : : : : : : :			; ; ; ; ; ; ;		2	1				1
			1		٠			:	1		1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1	1	1	1			1
		1	9			1	1	1	1		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		9	13				2
1			10					1 1 1 1 1 1 1			3	 	8	4		1		1
								i 1 1 1 1 1 1 1	t t t t t		1 1 1 1 1 1 1 1		1				1	1

	1		1	T	1			
感動詞	副詞	活用語已然形	その他	終止	活用語連体形 係結び	活用語命令形	活用語終止形	Patrick.
	1 0.4 %				5 2.0 %	18 5.9 %	246 96.1 %	醍地
2 0.7 %		1 0.3 %	1 0.3 %		21 6.9 %	14 4.1 %	221 72.7 %	罷 会話
		2 0.6 %	1 0.3 %	3 0.9 %	21 6.2 %		263 69.8 %	醍韻 文
					2 6.7 %		27 90.0 %	醍書
					6 2.9 %	20 6.6 %	203 96.7 %	真地
2 0.7 %	1 0.3 %				22 7.3 %	12 4.2 %	227 74.9 %	真会話
	1 0.3 %	2 0.7 %		3 1.0 %	13 4.5 %	1 3.6 %	240 83.9 %	真韻文
					1 3.6 %		24 85.7 %	眞書

文総数	不明	E
PPT-AND-AND-AND-AND-AND-AND-AND-AND-AND-AND	THE PROPERTY AND ADDRESS.	ラクノミ
270	14	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
329	25	# # # # # # # # # # # # # # # # # # #
355	17	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
31	1	1
238	28	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
340	37	1
 326	40	1
33	5	1 1 1 1 1 1 8

◇表2

倉 時 代 語 研 究

鎌

兀

有効文総数	助詞	体言
256	2 0.8 %	2 0.8 %
304	33 10.9 %	7 2.3 %
338	27 8.0 %	7 2.1 %
30	1 3.3 %	
210	1 0.5 %	
303	30 9.9 %	1 0.3 %
286	14 4.9 %	1 0.3 %
28	2 7.1 %	

は14項目が出現するのに対し、会話文では64項目、韻文では53項目に亙って出現する。このことは、会話文・韻文に於 会話文・韻文・書簡文について、表に分類した項目数を検討すると、醒醍寺本に於いて、地の文では28項目、 文や書簡に比べて、その表現が豊かであることを示しているものと判断される。便宜的ではあるが、表一より地の文・ 又、活用語以外の語で文を終止する場合の比率が高いということであって、このことは、会話文・韻文の文末が、地の であって、70%強である。これに次ぐのが、韻文である。即ち、会話部分や韻文部分では、活用語終上形以外の終止、 書簡部分がこれにつぎ、醍醐寺本では90%が活用語終止形である。逆に、活用語終止形の比率が最も低いのは、 いての文末表現が、豊富であることを示すものであろう。 右の表二より、醍醐寺本•真福寺本共に、地の文では、活用語終止形が9%以上を占めており、用例文数は少ないが、 書簡文で 会話文

三、漢籍訓点資料に於ける文末表現

氏文集・毛詩は、全文を対象とする。取上げた資料は次の通りである。 を含めて、漢籍の訓点資料を取上げ、会話文に限定して、その文末表現の検討を行うこととする。但し、序文の類と白 醍醐寺本遊仙窟に於いては、地の文に比べて会話文・韻文の文末表現が多様であると考えられるが、醍醐寺本遊仙窟

○高山寺本荘子鎌倉初期点〈荘子甲〉

אדע
倉
時
代
語
研
究

〇神田本白氏文集天永四年点〈白氏〉

○神田本白氏文集新楽府序天永四年点〈白氏序〉

○猿投神社本古文孝経建久六年点〈孝経〉 ○史記呂后本紀・孝文本紀延久五年点〈史記〉

○金沢文庫本群書治要序〈群序〉

○猿投神社本古文孝経序文建久六年点〈孝経序〉

○金沢文庫本群書治要尚書〈尚書〉

○金沢文庫本群書治要毛詩〈毛詩〉

会話文について、表二と同様にまとめたものが表三である。

<表3∨

(ヘ) は、表三に於ける略称)

	活用語連体形	活用語命令形	活用語終止形	
終止	係結び			
3 0.5 %	42 6.5 %	32 5.0 %	484 75.4 %	醍遊
	12 3.1 %	12 3.1 %	285 74.0 %	荘子甲
	41 4.4 %	19 2.0 %	732 78.2 %	神白本
1 0.2 %	16 3.5 %	66 14.3 %	341 74.0 %	史記
	2 2.1 %		78 90.7 %	孝経序
			164 91.1 %	孝経
	25 4.0 %	22 3.5 %	546 87.9 %	詩経
		1 1.7 %	55 93.2 %	群序
	8 1.4 %	131 22.9 %	423 74.0 %	尚書
			61 100.0 %	神白序

四四四

有効文総数	不明	助詞	体言	感動詞	副詞	活用語已然形	
1.1	100						その他
642	42	60 9.3 %	14 2.2 %	2 0.3 %		3 0.5 %	2 0.3 %
385	159	53 13.8 %	14 3.6 %	2 0.5 %	7 1.8 %		
936	131	96 10.3 %	46 4.9 %		1 0.1 %		1 0.1 %
475	93	15 3.3 %	20 4.4 %		2 0.4 %		
86	9	2 2.3 %	4 4.7 %				
180	54	12 6.7 %	4 2.2 %				
621	151	17 2.7 %	10 1.6 %				
59	1	2 3.4 %	1 1.7 %				
572	90	19 3.3 %	9 1.7 %				
61	3						E

90%を越えて出現する。以上の資料は二群に分けられ、前者、遊仙窟・荘子・白氏文集及び史記が、紀伝道関係の訓点 漢籍訓点資料における文末表現について 四五

文庫本群書治要毛詩・金沢文庫本群書治要序・金沢文庫本群書治要尚書・神田本白氏文集新楽府序天永四年点の順に、

四年点・醍醐寺本遊仙窟となり、文末の活用語終止形・命令形の出現率は、約8%又は8%以下である。次に、史記延 ら配列したものである。表三を検討するに、比率の低いものから順に、高山寺本荘子鎌倉初期点・神田本白氏文集天永 この表三は活用語終止形の比率と、活用語命令形の比率とを加えて、醍醐寺本遊仙窟を最初に、その比率の低いものか

久五年点が位置し、90%足らずである。猿投神社本古文孝経序建久六年点以下、猿投神社本古文孝経建久六年点・金沢

鎌

資料であり、後者、孝経・毛詩・尚書は、明経道関係の資料であって、序文は、 るということになろう。 即ち、 紀伝道関係の訓点資料の会話文に於いては、 史記が問題となるが、それでも明経道関係の訓点資料に比較すれば、比率は若干低い。明経道 明経道関係の訓点資料の会話文に比べて、文末表現が多様であ 謂わば、地の文と考えられるものであ

関係の訓点資料に於ける会話文の文末は、活用語終止形・命令形の出現率から見れば、地の文と考えられる序文と同類

るものであると考えられる。 金沢文庫本群書治要尚書43項目、猿投神社本古文孝経23項目であり、紀伝道関係の訓点資料の文末表現の多様さを物語 高山寺本荘子53項目、神田本白氏文集72項目、史記延久五年点48であるのに対して、金沢文庫本群書治要毛詩44項目、 前節の如く、便宜的ではあるが、表一に准じて表三を分類し、所属項目数を比較してみると、醍醐寺本遊仙窟85項目、 であると認められる。

理解言語である訓読語の表現の幅が広く、多様であったということであろうと考えられる。 認められるが、このことは第一節に触れた漢籍訓点資料に和文系の語が出現することと無関係ではないように考えられ 紀伝道関係の訓点資料の会話文に於いては、明経道関係の訓点資料の会話文に於けるよりも文末表現が多様であると 第一節の和文系語の出現の用例は、紀伝道関係の会話文に多いようであるので、紀伝道関係の訓点資料に於いては、

おわりに

資料の会話文は、より地の文の訓読に近いことを述べてきた。 伝道関係の訓点資料の会話文・韻文の文末表現が、明経道関係資料の訓点資料のそれと比較し多様であり、 醍醐寺本遊仙窟を中心として、漢籍訓点資料に於ける地の文と会話文及び韻文との訓読語に差のあること、紀 明経道関係

後者の文末表現を通じて紀伝道関係の訓読語と明経道関係の訓読語との間に質的な差を認めようとするとき、 全く疑

上、訓読という言語行為の前提として既に漢文が存在している。訓読語表現のある部分は当然既存の漢文の表現に規制 されるはずであって、本稿に取り上げた文末表現についても既存の漢文の表現によってかかる差違が生じたものとも考 あることは認められよう。しかし、この結果が何に起因したものであるかが問題となる。漢文訓読が理解行為である以 問がない訳ではない。集計の結果は、比率の上で差を示しているものと考えられ、訓読により成立した訓読語に違いが

○湯白「孰 可 (音) (高山寺本荘子巻第二十八174)

えることもできよう。確かに、

の如く、漢文本文に「孰」「何」字などが存する場合、文末の表現は原漢文に規制されるのであり、文末表現の異同は、〇十娘 日、「(中略)小府、何 須 漫-怕 」(醍醐寺本遊仙窟เช) 紀伝道関係の訓点資料と明経道関係の訓点資料との原漢文に於ける文体的差違を訓読語の上に反映したものであるとの

考え方も首肯できるものであり、これを否定するつもりはない。

の如き「コソ……已然形(係結)」「ゾ……連体形(係結)」「連体形終止」に於いては、 訓読語表現の前提としての原漢文

漢籍訓点資料における文末表現について

四七

時 代 語 研

究

の中での表現性の問題であろうと考えられ、これらは文末表現の差として現れる。又、明経道関係の資料中にも存在し 即ち原漢文の文字面によって謂わば必然的に成立した訓読表現とは考えにくく、むしろ、 訓読という言語行為

○常 畏 、 過 行 以 羞 先帝之貴憲。(「「ラ「」コπ寿気イトはトサロン 月ンイワン にメックラクメ、 ト、タッタシメイロヒッ と ト、タッタシメイロヒッ ない訳ではないが、紀伝道関係の資料の中では、文の倒置が目立つ。例えば、史記孝文本紀延久五年点に

の如き例が存し、右傍の訓に従えば倒置であると考えられるが、左傍の訓に従えば返読の例である。同一箇所の訓読に○常 畏 、 過 行 以 羞 先帝之遺徳。(「行」右傍仮名虫損不明)(カス) 異同の現れた例で文末表現に差の現れる例であるが、倒置とするか返読とするかは訓読の場では問題であったと考え得

行うかは、ある程度訓読語の側の表現の問題に帰する部分のあることであり、これにより、文末表現に差の生じること 文の倒置が原漢文の制約から全く無縁でもあるともいえないが、倒置として訓読表現を行うか、返読して訓読表現を

ば 原漢文の制約を全く無視する訳にはいかないであろうが、和文系語の出現の状況と文末表現の寡多とを考え合わせれ 紀伝道関係の訓点資料に於いては、より多様な訓読が行われていたと認めることができるものと考えられる。

が考えられる。

る例である。

1

築島裕「成唯識論の古訓法について」(『国語と国文学』第四十六巻第十号、昭和四十四年十月) 築島裕「平安時代の古訓点の語彙の性格―大日経の古訓点を例として―」(『国語学』第八十七集、昭和四十六年十二月)

小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(昭和四十二年三月、東京大学出版会)

三保忠夫「蘇悉地羯羅経古点の訓読法」(『国語学』第一〇二集、昭和五十年九月 築島裕「大日経疏の古訓法について」(『五味智英先生古稀記念上代文学論叢』昭和五十二年十一月)

月本雅幸「不動儀軌の古訓点について」(『築島裕博士還曆記念国語学論集』昭和六十一年三月)

2 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就きての研究』(昭和五十七年三月、武蔵野書院

- 3 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(昭和四十二年三月、東京大学出版会)
- 4 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(昭和三十八年三月、東京大学出版会)

和五十九年五月)

5 小林芳規「石山寺蔵仏説太子須陀拏経平安中期点の訓読語について」(『訓点語と訓点資料』第七十一・七十二輯合併号、

付記 導を戴いた小林芳規先生・菅原範夫氏に深甚の謝意を表する次第である。尚、本研究は、文部省科学研究費総合研究(A) 「平安鎌倉時代語研究資料の綜合的調査研究」(代表 本稿は、平成元年鎌倉時代語研究会夏期研究集会に於いて口頭発表したものに基づいて改稿したものである。席上、 小林芳規)の研究成果の一部である。